

University Academic Repository

言語学史概論:認知革命が起こるまで

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-10-01 キーワード (Ja): キーワード (En): language, human beings, philosophy, entity, nature vs. culture, structuralism, semiotics 作成者: 高野, 秀之, タカノ, ヒデユキ, Takano, Hideyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/257

研究論文

言語学史概論

— 認知革命が起こるまで —

A Brief History of Linguistics
before Cognitive Revolution

高野 秀之

Hideyuki Takano

<要約>

本稿は、平成 20 年度嘉悦大学特別研究『認知言語学を理論基盤とした文法教育の研究』の第 1 章として共同研究者に提供した、言語学史の概要部分を加筆・修正したものである。その中で、筆者は認知言語学を最新の言語観として位置づけ、言語学の歴史において、その要請はことばに関する哲学的な議論の当然の帰結であると主張している。

近代以降の言語学史において、最新の言語理論というものは、直前の言語観をアンチテーゼとして成立したものであるという見方が、一応、共通の認識になっている。しかし、それでは言語研究の歴史の中で展開されてきた言語観の変遷は不問に付され、最新の言語観と直前のそれとの差異ばかりが過剰なまでに強調されているような印象を受ける。理論言語学の目的は、最新の言語理論がどれだけ言語一般の特性を表すものであるかを共時的に検証するとともに、そこに至るまでの言語観の変遷を通時的に実証することにある。ことばをどのように扱うのかという問題は、ある言語理論がどれだけ多くの言語に対応するものであるかを論じるだけでなく、それぞれの時代において言語学者がどのような視座に立ち、何を取捨選択してきたのかを振り返ることによって初めて明らかにされるものである。

今回の取り組みが、哲学者や思想（史）家から浅薄なものであるという指摘を受けることになったとしても、それは次の言語理論を創出する過程においては、必要不可欠な作業であると考えている。言語学者自身が言語観の変遷を振り返ることにより、言語学は更なる発展を遂げるのである。

<キーワード>

言語 (language)、人間 (human beings)、哲学 (philosophy)、認識の対象 (entity)、自然と文化 (nature vs. culture)、構造主義 (structuralism)、記号論 (semiotics)

0. はじめに

本稿の目的は、伝統的な言語研究が現代的な言語学として成立するまでの歴史的背景を概観することにより、認知言語学という最新の言語理論は当然の帰結として要請されたものであるということを主張することにある。その中で、言語一般に関する言語理論の移り変わりを広く見渡すことを目指しているが、その多くは筆者の母語である日本語と、その学問的背景となる英語の文献から得た知見に基づくものである。そのため、本稿における言語学の歴史的研究は、専ら英語と日本語に関する研究に拠るところが大きい。

認知言語学とは、ことばの本質と人間の認知（即ち、人間のこころのはたらきに基づいた、主体的な意味づけ）とが深く関わりあっていると、比較的、新しい言語理論である。この言語理論においては、自然言語の相対性と普遍性（或いは、一般的な傾向）が、どちらも容認される。そのため、複数の言語間に観察される構造上の違いや言語記号が担う意味範疇のずれというもの、特定の言語共同体（即ち、ある言語が用いられている国や地域、或いは、その文化圏）において、そこに住む人間が創り、使い、変化させてきた社会的慣習が反映したものとして捉えられる。しかし、同時に、こうした違いやずれは、種としての人間が進化の過程で獲得してきた身体性（とりわけ、上下左右の非対称性）や認知能力（知覚、感情、思考、学習、記憶）に動機づけられており、したがって、そこには共通点も多く観察されている。例えば、環境世界（即ち、物理的、客観的な意味での世界ではなく、人間が自らに備わった感覚器官で捉えることができる世界）の分化（或いは、分節）や意味拡張の方法には、人間の認知が広く一般的な傾向として反映しているということが実証されている。これらを理論的基盤として、認知言語学は、本質的に、ことばというものは人間の認知に動機づけられたものとして捉える。

また、これまでの言語理論が、ことばは他の領域から自立した、閉じた体系であると主張するのに対し、認知言語学は、ことばはそれを使う人間に関わるすべての領域と結びついてあるものとして捉える。これは、不確定要素が多いという理由で、永く言語研究の対象から排除されてきた人間のこころの揺らぎや、人間として自然であると思われる振る舞いが、ことばの在りようを動機づけているとする言語観に基づいている。

言語学がその研究対象であることばを閉じた体系として扱ってきた理由は、その成立に至るまでの背景に見て取ることができる。後発の学問である言語学は、当時、すでに成立していた（自然）科学の方法に倣って、その理論を構築する道を選択した。そのため、研究対象であることばを他の領域から自立したものとして見なし、厳正な規則（或いは、法則）に基づいた、言語現象の記述に活路を見出そうとした。しかし、極度に科学的であろうとしたことにより、言語学はことばを使用する人間までその研究対象から排除してしまい、結果として、ことばの本質を見誤ることになってしまう。

また、近代以降の言語学は、最新の言語理論を成立させるために、直前の言語観を一方的

に批判の対象とすることによって、新たな言語観を提案するという手続きを採る傾向を強めた。言語観相互の差異ばかりが強調されることになると、最新の言語観とそれ以前のものとの間の関連は断ち切られてしまい、最新の言語理論というものは、まるで、自然発生したものであるかのように捉えられるようになった。

こうした風潮の下で最新の言語観に遭遇する若手の研究者は、数世紀も前に議論し尽された問題に触れた経験が無いまま、最新の言語観に基づいた言語理論を実証的に洗練しようとする。そのため、彼らの中には、最新の言語理論というものは、特定の言語学者に批判された直前の言語観がコペルニクス的に（即ち、180度）転換したものであると思込んでしまう者も在る。

最新の言語理論である認知言語学が言語学の（先達たちの）思考の結晶であることに疑いの余地は無い。しかし、仮に、その発展のベクトルを極度に単純化させてしまい、まるで直線のようなものであると想定した場合には、連続するパラダイム転換が二世代前の言語観に戻ってしまうということは考えられないであろうか。

ことばのもつ複雑さやその多面的な性格がゆえに、「裏の裏は表」のような言語観の変遷は、少なくとも、これまで起こらなかった。それは、これまでのパラダイムシフトが、ある方向にゆき過ぎた（言語観の）振り子を軌道修正させ、それ以前の言語観を再検討したうえで新たな言語観を成立させてきたからに他ならない。言語観の変遷を歴史的に振り返るということは、新たな知を生産する人間的な思考とその方向性（即ち、真理の追究）や、行き過ぎた知の追求からの回帰や自己抑制（或いは、人間の気づき）、更には、人間が選択し得る新たな視点とその導入の軌跡をたどることを意味する。これは同時に、ことばの本質を追究しようとする人間の哲学的な思考の歴史（或いは、その痕跡）をたどることでもある。

読者の多くは、限られた知識しか持たない筆者が、哲学や思想史の表層的な議論の一角にも満たない、浅薄な歴史観を振りかざそうとしていると感じるかも知れない。それを承知の上で言語学史に挑むのは、筆者が、哲学や思想の変遷も、人間のこころのはたらきと身体性に動機づけられてきたものであると信じ、（認知言語学的な表現で例えれば）「人間の為すいかなる業も、予測することはできないが、すべて動機づけられたものである」と捉えているからである。

専門家諸氏からのご指摘やご批判は、筆者にとって、この上ない歓びとなるものである。なぜなら、それは、深い洞察をもって取り組まれた方々の示唆に富んだ歴史観や哲学的思考に触れる、絶好の機会になると信じているからである。

本稿を通じて、若い研究者たちが、最新の言語理論というものは言語学の歴史の一部として存在しているに過ぎず、今後の研究活動の中で、彼らが最新とするものをアンチテーゼとする次の言語観に遭遇する可能性があるということを認識してくれたら幸いである。また、本稿が認知言語学の真の発展のための一助となれば、それは何よりの誉れとなるであろう。

本稿は、平成20年度嘉悦大学特別研究『認知言語学を理論基盤とした文法教育の研究』

の第Ⅰ章「言語研究の歴史的背景」の前半部分を加筆・修正したものである。特別研究の意義を十分に理解し、申請内容の妥当性を承認するとともに、共同研究者（非常勤講師）にも同等の研究環境を提供して下さった学校法人嘉悦学園に対し、心からの感謝を述べたい。大学英語教育の発展に向けた取り組みは、共同研究者とともに、今後も継続してゆくつもりである。

I. 古典的な言語研究

ヨーロッパにおける伝統的な言語研究の歴史は、紀元前3～4世紀、ヘレニズム文化の主要都市であったアレキサンドリアに起こり（石橋ほか編 1973, p.660）、主な目的は原典の書誌学（bibliography）、本文批評（textual criticism）、注釈（annotation）であったとされている。（田中ほか編 1988, p.485）当時の言語研究は、ことばの本質を追究する学問というよりも、むしろ、文献学（philology）や文芸批評（literary criticism）に近いものであったと推測することができる。

都市の発展とともに集まってくる膨大な数の書籍と、その文献学的研究からの恩恵を受け、哲学者や思想家は『ことばとは何か』という問いをたて、純粋な思考によってことばの本質に到達しようと試みた。当時の研究者（即ち、ソフィストと呼ばれた哲学者や思想家）にとって、ことばは、あくまでも、真理を追究するために弄される思弁の道具に過ぎなかったのである。こうした事情の下で誕生した伝統的な言語研究は、永きにわたり、哲学や論理学の別称として扱われることになる。

1. 言語道具観

伝統的な言語研究は、ことばを人間が作り出した道具として捉え、「ことばとは何か」という哲学的な問いの答えを模索することから始められた。人間は、自ら道具として作ったことばを用いて文化を創造する。したがって、ことばと人間の関係を明らかにすれば、ことばの本質に到達できるという考え方（即ち、言語観）である¹⁾。

言語道具観は、また、「文化の創造者である人間は、その文化を創り出す上で重要なことばを獲得したことによって初めて自然から自立した」という世界観をもたらした。この自然と文化という二項の対立関係から、人間が人間らしく在るためには理性が必要であり、理性の獲得は倫理の追求によってのみ実現されるという発想が導き出され、永くヨーロッパ思想の中心的な役割を担うことになる²⁾。

人間の道具である（とされた）ことばの本質に近づくため、「ことばとは何か」という問いは、より具体的な問題に発展させて議論する必要があった。より具体的な問題に発展させたものから、近現代的な意味での言語学が誕生してゆく過程を推測してみることにする。

- (a) 人間は、いつ、どこで、どのようにことばを手に入れたのか
- (b) 人間は、何を表すためにことばを使うのか
- (c) 人間は、どのようにことばを使うのか
- (d) ことばは、どのような働きをするのか

より具体的に発展させた問題 (a) が示唆する「言語起源説」は、宗教的・社会的（即ち、政治的）抑圧の下で言語研究が進められるという苦難の時代を経て、歴史言語学や比較言語学という、言語研究の基礎を築くことになった。(b) は、後の音声学や音韻論（或いは、その表記法の基礎となる形態論）の基盤となり、統語論や意味論の要請に至る。その延長上でコミュニケーション理論を形成し、音声（後には、文字）が表す意味の研究にまで発達してゆく。(c) は、意味論を経て、語用論へと進む。これにより、ことばは、実際に使用される（現）場において、音声や文字を超えた意味を生成することができるということを示唆するようになる。(d) は、古典的な言語研究の研究成果（例えば、修辞学や文体論）の流れを受け継ぎ、構造主義言語学（とりわけ、記述言語学）として、目覚しい発展を遂げることになる³⁾。

2. 言語起源節

「言語の起源をたどる」という作業のあらわす意味合いは、古代ギリシャの研究者と我々の間では異なる。なぜなら、当時の研究者にとって、「言語の歴史的研究がもつ時間の尺度が今日よりずっと短かった」(Robins 1990, p.26) からである。我々が1,200年前の語について理解するのが困難であるのに対し、当時の研究者は、数百年もさかのぼると、神話の世界で人間が神々とまじわりあっていたという計算になるからである。

当時の語源研究の目的は、「神々から授かり教わった、音声的に適正なごく少数の原初の単語がどのように増加して、まずギリシャ語の、続いてラテン語の膨大な数の単語を生み出し、学問や文芸の栄える文明の要請に対処してきたか」(同上 p.26) という問題に対し、真正面から取り組むというものであった。「原初の単語」が当時の語にまで変化した過程を意味的にたどるという作業は、時として、無理なこじつけや「ただのいんちき」(同上 p.27) に陥りやすく、この一点をもって当時の言語研究全体が非難の対象となることもあった。

当時はまた、先に述べた「自然と文化」という二項対立の下で、2つの議論が複雑にからみあっていた時代であった。その一方は、「神々より授け教えられた」ことばは古代ギリシャの研究者が生きた時代までに慣習的に転用されたものであるのか、何らかの法則の下で変化した結果なのかという議論であり、もう一方は、あくまでも、ことばは人間が創り出した道具であり、それが慣習的に転用されたのか、何らかの法則に基づいて継承されたのかというものである。この議論はヨーロッパ中世の宗教改革の時代まで繰り返され、その時々優勢な政治的・宗教的教理の解釈に翻弄されてゆく。

3. 言語命名目録観

1節の発展問題「(b) 人間は、何を表すためにことばを使うのか」は、人間がことばを使う目的を問う問題であるとともに、ことばが表す対象を問う問題として捉えなおすことができる。それは、「人間は、何を認識するためにことばを使うのか」という、より具体的な問題へと発展させることになる。人間の認識の問題を通じてことばの本質に到達しようとする試みは、しばしば対話形式で議論された。

ソフィストの時代において（即ち、伝統的な言語研究が始まったころ）、人間の認識に関して優勢な考え方は、ことばの相対説であった。ここで言う相対説とは、人間は認識の対象とするモノにふさわしい名前を付しているの、その名前がどれだけ対象となるモノの本質を表しているかによって、そのことばのよしあしが決まるというものであった。したがって、ことばの主たる機能は、人間が認識する対象を名づけることにあったと考えることができる。こうした言語観が、言語命名目録観である。

ソクラテス（BC469?～BC399）は、弟子のヘルモゲネスとの対話（水地、田中訳 1974, p.8-22）の中で、人間が認識する対象とその名前の関係を次のように位置づけている。

- ① 言明（平叙文）には真偽の別がある。したがって、言明の最小部分である名前にも真偽の別がある。（名前が名づけられる事物の本質を表していないならば、その名前を含む言明も真ではありえない、というわけである。）とすると名前は気ままにはではなく、真であるふうに定められるべきであろう（三、385C）。
- ② 事物は客観的な、固定した本質を有している。そして作用も事物の一種である。したがって、作用は作用と作用対象との本性に合致するふうに行われるときのみ成功する。ところで「言明する」ことは一種の作用であり、「名づける」（名をいう）ことは言明する作用の一部分である。それゆえ名づけることも気ままにはではなく、本性に則して行われるべきである（四一八）。
- ③ 名前は事物の本質を識別し教示するための道具と規定される。そしてこの道具をうまく製作できるのは、法と慣習を定める技術を知る者のみである（七一八）。

（水地・田中訳 1974, p.416-7）

ソクラテスの表現を現代的な意味での言語学の知見に基づいて解釈すると、次のように言い換えることができる。ここで、「モノの名前」の多くを名詞に、「その本質」の多くは本質的な意味、「作用」をその機能として置き換える以外、逐語訳に近いパラフレイズを試みる。

- ① 人間が何かの対象を言い表す場合、そこには真偽の区別がある。したがって、その表現の最小単位となるモノ（及び、それを指示対象とする名詞）にも真偽の区別があると捉えることができる。「その名詞が対象の本質的な意味を表していないのなら、その名詞を含む表現は事実を

表していることにはならない」と考えるなら、モノの名前が本質的な意味を表しているはずである。

- ② 人間が認識する、対象には固定した意味がある。その対象が何らかの働きをする場合も、また認識の対象となる。したがって、ある対象の働きというものは、その働きと対象の本質に合致するように行われなければならない。人間がことばを使うということが認識する対象の働きとすれば、それは対象に名前をつけるということと同じはずである。対象の名前は、その対象の本質に則したものでなければならない。
- ③ モノの名前とはその本質をその他の対象と区別し、それを他者に伝達するための手段である。モノに名前をつけることができるのは、きちんとした知識を持ったものだけである。

こうしてソクラテスの考えを読み直すと、ことばとは人間が認識する対象の名前そのものことであり、ことばの意味というものは、名づけられた対象が本質的な意味を持つかどうかで保証されることになる。しかし、人間が新たに何かを認識する度に、その対象を有識者に依頼して命名しているという言語観は受け入れ難い。その一方で、ことばには識別と伝達の機能があるという捉え方は注目に値する。人間がことばによって価値体系を構築しているという視点はソシュールの記号論に、ことばの伝達機能はコミュニケーション理論に通じるものである。

4. 主知主義

ソフィストの多くは、人間は、不完全であるがゆえに、いかなる対象も完全には再現できず、したがって、人間はいかなる対象をも認識することができないという意味でも相対説を唱えていた。これに異を唱えたのが、プラトンである。

プラトン (BC427?~BC347?) は、人間には見ることも触れることもできない (即ち、実在しない) が、誰もがその意味を理解することができる完全不滅の真実として、イデア (idea) というものが存在すると主張した。プラトンは、人間が現実の世界 (プラトンの言う感覚世界) に在る対象を認識することができるのは、その対象の背後にイデアが存在しているからであり、現実の世界における対象自体はイデアの影に過ぎないと考えた。

比喩的ではあるが、プラトンは、人間の魂はもともと天上のイデア界に在ったものであり、それが現実の世界に転落し、肉体という牢獄に押し込められた時にイデア界における記憶が失われてしまったと説いている。人間が不完全なるものを「不完全である」と指摘することができるのも、人間がイデア界に在った時にすでにすべてのイデアを体験しているからであると考えたのである。

イデア論に基づくプラトンの言語観は、概念的な認識の源としてのイデアを想定し、人間がある対象を認識する以前から、その対象には概念的な意味が備わっていると、主知主

義に基づいている。この主知主義的な言語観は後にソシュールによって完全に否定されることになるが、「人間が認識できる感覚世界と、知や徳が導く概念的な理想世界とを区別する」という発想は、認知言語学が環境世界と客観的・物理的世界とを区別する世界観に通じるものがある。また、主知主義に基づいた言語観は、ソシュールの後に登場するチョムスキーの言語生得説の根本理念になっていることも、興味深い事実である。

5. 人間が認識する対象の存在

プラトンの弟子であるアリストテレス（BC384～BC322）は、人間が認識する対象は天上のイデア界のイデアの模倣であるとする言語観を否定し、人間が認識の対象とするモノが現実の世界に存在していることを明らかにしようとした。（出訳 1959, p.226-294）

アリストテレスの主張によれば、人間が現実の世界において認識する対象は個物と呼ばれ、その個物は無定形の質料（即ち、認識する対象を構成する材料）と形相（けいそう）から成るものである。形相は無定形の質料に形を与え、人間が認識する対象を個物たらしめる普遍的特徴（即ち、本質）であるとされる。プラトンのイデアと形相とを同質のものであると捉えることもできるが、プラトンがイデアの存在を天上の理想世界に求めたのに対し、アリストテレスは形相を人間が認識する対象そのものに内在する（即ち、現実世界に実在する）と考えた。

アリストテレスは、また、プラトンがイデア界を想定したことにより、現実世界と理想的な世界とを対立する二元論的な世界として捉えるのに対し、すべての個物が自ら存在目的を実現させようとする目的論的世界観を唱えた。地上に存在するモノが個物となるのは、形相に内在する可能態（理想とする姿）が、成長とともに実現態（在るべき姿）へと移行するためであるとし、人工物が個物となるのは、形相に内在する可能態が人間の技術によって現実態へと移行したためであると説いた。

更に、アリストテレスは、目的論的世界構造の頂点として、可能態から実現態へと移行することの無い純粹形相というものを想定した。この形相は、人間が認識するすべての対象を在るべき姿にまで移行する（即ち、人間が認識するすべての対象を捉えることができる状態にする）エネルギーの根源であると考えたのである。

アリストテレスの目的論的世界観は、人工物のみならず、自然物（特に、植物）の成長にも適応するという理由から、人間の認識対象の存在を議論するうえで広く用いられた。しかし、この世界観も、アリストテレスの師であるプラトン同様、人間が対象を認識する以前から、その対象の在るべき姿が想定されているとする主知主義的世界観からは抜け出していない。その一方で、この世界観の基盤となる形相（即ち、人間が認識する対象の本質）を現代的な言語学の視点で捉え直すと、(形式)論理学の影響を強く受けていた時代の意味論が拠りどころとする「意味素性」の精密な設定方法が示唆されていることに気づかされる。

古代ギリシャ時代の言語研究を歴史的にたどる文献は、同時代における哲学的研究の成果を華々しく著すものほど多くはない。しかし、プラトンの対話編『クラテュロス（水地・田中訳 1974, p.126）』には、「統語論の分析と語の分類の根底となる第一次文法区分」（Robins 1990, p.30-31）となる「名詞と述語の分類」が観られ、それがアリストテレスによって細分化され、名詞から「屈折（代名詞・冠詞）／非屈折（前置詞／接続詞）」や、「固有名詞／普通名詞」という下位区分の整理が行われている。（同上 p.33）

また、アレキサンドリアを拠点とするアリストテレス（学派）と対立関係にあったとされるストア学派（ペルガモンを拠点とする哲学的学派）は、2つの時制（現在／過去）と2つの相（完了／未完了）の区別や、形態変化を引き起こす格変化の更なる分類を行っていた。

（同上 p.34-35）現代の言語学には遠く及ばない言語分析の方法であったとしても、古代ギリシャの言語研究者たちは、現代言語学において不可欠な用語の数々を定義し、文のレベルにおける研究を中心とした言語研究の重要性を認識していたと考えられる。

II. 中世以降

中世以降になると、すべてのものが、神の絶対的な存在のもとで認識されるようになった。当然のように言語神授説が唱えられていた精神風土の下で、人間がより人間らしく生きている証となる正しいことば遣い（特に、読み方・書き方）への関心が高まっていった。このように、中世以降は、正しいことば遣いの手本（規範）が文法書の編纂というかたちで盛んに行われるようになった時代でもる。

文法書の編纂のために集められた文例の多くは、正しい読み方・書き方の手本というより、むしろ、「正しいことば遣いとはかくあるべき」、「美しいことば遣いとはこうしたもの」という主観的な判断基準がすでに存在しており、それを説明するのに適したものだけが集められたと言われている。（Culler 1976 p.76、町田 2004 p.15）

そうした時代を背景に、言語研究者は、ことばを通じて認識することの重要性について考察するようになり、そこから主体と客体という二元論的な対立構造を構想してゆくことになる。

1. 普遍的懐疑から導き出された自己：認識する主体と認識の対象

デカルト（1596-1650）は、『方法序説（特に、第4部）』、及び、『省察』の中で、想像することができるすべての対象に**普遍的な懐疑**を向けたうえで、そうして疑う「私」の存在にだけは疑いの余地が無いという結論（或いは、デカルト哲学における「第一の原理」）に到達した。

…わたしが明証的に真であると認めるのでなければ、どんなことも真として受け入れないことだった。言い換えれば、注意ぶかく速断と偏見を避けること、そして疑いをさしはさむ余地のまったくないほど明晰かつ判明に精神に現れるもの以外は、何もわたしの判断のなかに含めないこと。

(谷川訳 1997, p.28)

これは、「我思う、ゆえに我在り」という、デカルト思想の出発点となる純粹知性の獲得への過程として広く知られている、「明証性の規則」である。しかし、第6の省察にいたってデカルトは、自分自身の思考のもととなる精神と認識対象を感覚の延長上で捉える身体とを分離させてしまう。

…私は、私にきわめて緊密に結合した身体をもつとしても、しかし一方で私は、私が延長するものではなく単に考えるものであるかぎり、私自身についての明晰判明な観念を持っており、他方で身体が考えるものではなく単に延長するものであるかぎり、身体の判明な観念をもつのであるから、私が、私の身体から実際に区別され、身体なしに存在しうることは確実である。

(山田訳 2006, p.118)

後にデカルトは、「精神と身体の合一 (同上 p.122)」という表現で両者の複合作用を認めている。しかし、それはデカルトの言う「本性」をともにしているという意味ではなく、異質なものが何らかの事情で同時に作用しているという意味である⁴⁾。

精神と肉体の分離を経て、不完全ながらもそれらの合一に至ることにより、デカルト自身は認識主体として存在することに対する疑念を払拭したと考えられる。この、認識主体と認識の対象（即ち、「客体」）との分離、及び、両者の合一（即ち、「主客合一」）という概念は、言語研究を大きく飛躍させることになる。その影響は、「一般言語」ということばの共時的研究に、ことばを用いた対象の認識方法は、その構造に影響する可能性を示唆するものであったから。

2. 規範文法と言語の普遍性

やがて、ことばは倫理観に基づいた人間の思考の反映としてではなく、人間の思考自体には一定の法則があり、その法則に基づいてことばは構造化されているという言語観が誕生した。そこから、ことばを作り出すことが人間に共通の特徴であるならば、人間が作り出すすべてのことばにも普遍的な特徴が存在するはずであるとする、言語の普遍性が要請されるようになる。

しかし、人間の思考自体の法則や、概念の形成過程に則してことばの普遍性を追求するのであれば、対象となる概念を人間が認識するまでの過程が存在するということを論証しなけ

ればならない。言い換えると、どのような認識の過程を経て対象は概念化されるのかという問題に取り組むために、ことばの歴史的な研究が必要となるということが明らかにされたのである。

そこで注目されたのが、「文法的な正しさ」という基準で言語データを処理するという方法であった。文法的に正しいものであれば誰にでも理解されるのだから、その正確さの追求こそが言語研究の中心であると捉えられたのである。

しかし、非文法的であっても伝達される例（文）や、不完全な方法（例えば、方言やアクセントの違い）による識別の可能性が指摘されると、この規範に則った文法というものがない不完全なものとして扱われるようになった。

また、文法の規則に根拠を与えられない場合には、歪んだ恣意性（つまり、『そうになっているのだから、そういうものなのだ。』という理解）がことばの在りようとして誤解されてしまうことにもなり兼ねない。

後にコミュニケーション理論が「言語のコード」という概念を導入するまで、規範文法は不安定な立場に置かれることになる。

3. 比較言語学

ことばの歴史的な研究と比較言語学とを同義と見なす向きがあるが、両者の方向性が、その目的の違いとして現れている。ことばの歴史的な研究は、あることばがどのような変化をたどって現在に至ったのかを、時系列でたどるものである。それに対し、比較言語学は、現存するいくつかのことばに見られる言語的な共通性を集め、それらを統括することばの祖先（祖語）を想定するというものである。歴史言語学が現存する最古のことばからの形態変化に関心を抱くのに対して、比較言語学は相互の接触があったとは思えないほど遠い言語どうしを結びつけ、その系統発生の痕跡を明らかにすることに関心を抱く。

複数の言語に共通する特徴は、それをを用いている人間の文化的・地理的な条件を超えて存在するということが明らかにされた。18世紀半ばに発見されたサンスクリット語は、それまでに解明されていたヨーロッパの諸言語（ギリシャ語、ラテン語、ペルシア語、スラブ語、そして、ゲルマン語）と多くの共通性が認められている。比較言語学の研究から得た言語データを基にしてことばの歴史的な研究は再構成され、「インド・ヨーロッパ祖語」というべきものを想定し、それを探求する方法を提起してゆくようになった。

この発見を期に、言語研究の方法も様変わりした。直接、未知の言語に触れることによって言語データを収集する文化人類学の活躍は目覚しくなり、従来の方法で言語研究を行う学者は *armchair scholars* と揶揄されることさえあった。

4. 伝統的な言語研究への批判

哲学的・神学的な制約を永く受けてきたことばの研究は、近代的な言語学として成立するための方法を求めるようになった。これは即ち、客観的な言語データの分析結果から一般的な法則を導き出そうとする（自然）科学の方法に他ならない。言語を科学的に研究する方法として着手されたのは、伝統的な言語研究の方法の誤りを指摘し、それを批判することであった。ここでは、ソシュールの研究を中心に、伝統的な言語研究に対する批判について検証する。

ことばはものごとの名称として存在し、したがって、ことばの主たる機能はそれらに名前を施すことにあるという主張は、その名前が付けられる以前に対象となるモノの概念が存在するという前提が不可欠である。ソシュールは、この主知主義に基づいた言語名称目録観を退け、ことばによって始めて概念は分割され、それまでの連続体が非連続体となった記号が、それをことばとして用いる共同体の中で形式化されると考えた。

コトバによる表現を捨象して考えると、われわれの思考というものは何一つ区切りのない無形の塊のようなものなのだ。...はじめから分節された一般的な観念が存在していて、それに各語が、音声のラベルを貼るのではない。

(丸山 1981, p.204)

ことばの形式（構造）があらわすもの（意味）を記述するという研究の前提には、人間より先にことばが存在していなければならない。しかし、ことばは人間が作ったものであり、そのことばを使用する過程において、人間が自らの必要に応じて変化させていったと捉える方が、より自然であると思われる⁵⁾。

III. 構造主義言語学

構造主義言語学の研究者は、特定言語のデータを入手し、その構造を正確に記述することを目的としていた。ことばの在りように強く関心を抱く「形式主義」の研究は、言語を自立した体系としてみなし、文法的な文のみに適合する厳密な文法規則を規定することを主たる目的としていた。ことばを使う人間は言語研究と直接の関係がないものとしてみなされた。同様に、人間の自然な振る舞いを合理的に規定しようとする「行動主義」の研究では、実際に発話された言語データとその使用状況だけを研究対象としていたため、人間の感情や発話者の意図は研究の対象としてみなされなかった。(Taylor 2002, p. 5-6, 瀬戸 2008, p. 6-7)

こうした傾向は、後発の学問である言語学が、自然科学（のようなもの）として認識されるために必要であった、いわば、ゆき過ぎた自然科学化志向の表れである。しかし、言語学

は、ソシュールによって、その進むべき道を明らかにされる⁶⁾。

ソシュールは『なぜことばは通じるのか』という単純ではあるが根本的な疑問を投げかけることによって、現代思想と呼ばれる思考の方法を特徴づけた。また、言語学の目的を通時的な言語研究による歴史的な事実の解明から、すべての言語に共通する普遍性を探求しようとする一般言語学へと再転換させた。

1. ソシュールの記号論

ソシュールは言語を記号の体系として捉え、記号は概念（意味部門）と聴覚イメージ（形式部門）から成る心的な構造であると考えた。また、記号の意味を *signifie*（記号内容）、記号の形式を *signifiant*（記号表現）と名づけ、両者は2項にして1枚の紙の表裏のように切り離すことのできない統一体であるとしなした。この記号観をことばの語のレベルに還元すると、記号内容は語義に、記号表現は語形に対応する。

ソシュールは、語義と語形の関係（即ち、結びつき）に特別な理由はなく、あくまでも恣意的な関係であると主張する。記号内容と記号表現、語義と語形の間には恣意性が約束されていることによって、記号や語は人間の知識や関心の広がりや、その創造的な使用にも対応できるのである。（池上 2002, p. 23-26）

すべてのモノは、他者と相互にかかわり合いながら、体系（即ち、構造体）を成している。その構造を構成する各要素は階層関係にあり、相互の差異性からその価値は判断される。より上位の要素は下位の要素を統合（包摂）し、より下位の要素は上位の要素の具体事例となる。この世界観をことばに還元することによって、ことばは音・語・文という単位から成る記号の体系であるという言語観が成立する。これが、構造主義言語学の基本原理である。

2. 言分けと身分け

ソシュールは、人間がある対象を認識するためには、その対象が人間に認識できるようなもの（即ち、記号）である必要を説いた。たとえば、[イヌ] という抽象概念は、/イヌ/ という音と意味とが記号化された結果、[ネコ] や [ネズミ] という抽象概念から区別される。つまり、人間が [イヌ] を犬であると認識することができるのは、抽象概念の記号化によると考えたのである。これは、人間が記号操作によって対象を認識する「言（こと）分け構造（丸山 1983, p.250）」という、いわば、文化的ゲシュタルトである。丸山（同上）によれば、記号という言分け構造の獲得によって、人間は自然からの自立を果たしたのである。

それに対し、人間が生得的にもつ（或いは、進化の過程で獲得してきた）感覚器官によって環境世界（Umwelt）を相対化させる能力は、「身分け（同上）」という、人間が記号操作の能力を得る前から持つ、いわば、生態的なゲシュタルトである。（認知言語学では、これを

「身体性」の問題として扱う)

…自然のなかに即目的に存在する物理的構造ではなく、動物一般がもつ生の機能による、種特有の
 のカテゴリー化であり、身の出現とともに地と図の意味的分化を呈する世界である。

(丸山 1983, p.250)

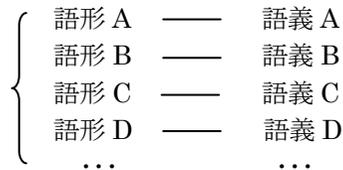
ここで言う「ゲシュタルト」とは、プラトンの「イデア」やアリストテレスの「形相」の
 ように、人間が認識する対象を具象化する抽象概念である。もとは心理学の用語で、「個々の
 部分が集まってひとつの構造（即ち、それぞれの部分から成る「全体」）を為す時、その全体
 は部分の総和以上の意味を有する」という概念のことである。

3. 恣意性の利点

ソシュールの言う記号の内部構造の恣意的な結びつきには、いくつかの利点がある。それ
 を説明するため、もう一度記号内容と記号表現とを語義と語形に還元し、それらが恣意的に
 結びついていると仮定してみる。

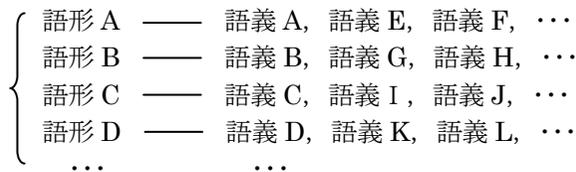
語義と語形が一对一の関係にあるとしたら、人間は新たな発見の度に別の語を作り、それ
 を通じて伝達・表現（同時に、その理解や認識）という目的を果たしてゆくことになる。そ
 れを表したものが、下の図1である。

図1. 語形と語義の1対1対応



人間にとって、記憶することができる記号の数は有限個なので、図1のように人間が一生
 のうちに体験する森羅万象と同じ数の記号を作り、それを用いて誰かと情報を交換している
 とは思えない。むしろ、下の図2のように、有限個の記号で複数の意味を表すことにより、
 それを理解していると考えのほうがより自然である。

図2. 語形と語義の1対複数対応



ソシュールの言う記号の恣意性は、人間がことばを用いる上で重要となる運用可能性を論証する上で有効である。しかし、記号の恣意性は後に拡大解釈され、言語の在りようが恣意的であるかのように捉えられる傾向が観られる。そのため、ある語（形）にどれだけの語義が結びつく可能性があるのか、結びつけられた語義の間には何らかの関係があるのかという問題には対応できていないという理由から、記号の恣意性は、ソシュールの言語観（広くは、構造主義全体）を否定する根拠にされることもあった。

4. アメリカ構造主義言語学

時を同じくして登場するのがアメリカ構造言語学という学派で、物理学の影響を受けて文法構造の体系化を進めるブルームフィールド学派と、現地へ赴いて未知の言語の構造を明らかにしようとする文化人類学的な研究とに分かれていた。ダーウィニズムの影響からか、ことばをまるで一個の有機体のように進化の対象として捉える動きもあり、多くの批判も受けている。しかし、アメリカ構造言語学の最も大きな功績は、ブルームフィールド学派によって文構造の記述方法が明らかにされたことと、ウォーフを中心とした文化人類学が言語相対説を確立したことにある。

5. 言語相対説：文化としてのことばと、それが人間に与える影響

文化人類学の研究が進むと、ことばは文化の一部であるという認識が広く受け入れられるようになり、言語を相対的に捉えようとする研究が始まった⁷⁾。未知の言語を研究するには、それが用いられている言語共同体における文化として受け入れるため、その言語を使って生活している人間と言語との関係を取り扱う必要があるという視点が導入されるようになった。

...言語はそれを表現・伝達的手段として用いている共同体の文化を自らの構造に反映する象徴体系であり、それが表現・手段のもっとも重要な媒体となされることによって、それをを用いる人たちの思考や行動の様式までを特定の方向に規定するという考え方...

(池上, 1992, p.14)

ことばと文化を相対的に捉えようとする、ことばは、その言語共同体が属する文化ごとに「好まれる言いまわし (fashion of speech)」というものを有するということが明らかにされた。こうした研究から、言語の相対性によって、特定言語の優位性や価値を判断する基準にはなり得ないということが認識されるようになった⁸⁾。

しかし、言語の相対説は個々の言語の違い方に関心が集まらないため、ことばが好き勝手に異なるという印象を与えた。後に、言語間に見られる違い方にも傾向があり、それは、言

語の使用者である人間とのかかわりに動機づけられているということが明らかにされる。

6. 言語類型論

ことばを使う人間が言語研究の対象に含まれるようになると、特定言語の絶対性や言語間の相対的な差異から、その共通性に関心が移行されていった。その結果、ことばや文化を超えて人間に共通の振る舞い（例えば、前後・左右・上下といった空間認知の仕方）が、どのように個別言語の構造に反映されるのかが研究の対象になっていった。

言語一般に共通すると考えられる特性を用いて区分すると、ことばは有限個のタイプに分類できることが明らかになった。例えば、基本的な文構造が[SVO /SOV/ VSO/ VOS/ OSV/ OVS]という有限個のタイプに分類してみると、述語動詞（V）が主語（S）に先行する言語が無く、世界中の 90%以上の言語は[SVO]か[SOV]に分類され、そのうちの[SVO]には前置詞、[SOV]には後置詞が認められるということが明らかになった。言語類型論の研究によって、（誤った）構造主義言語学者の「記号の内部構造が恣意的であるように、ことばは本質的に恣意的である」という捉え方が否定されるようになった。

言語類型論が果たした最も大きな貢献は、それ以前の言語研究が、個別言語の特性に注目するあまり見落としてきた次の2点に明確な説明を与えるに至ったことにある。第1の点は、前節の言語相対説に基づいた説明で、人間の言語は、その使用者である人間の心の働きの柔軟性をも反映し得るのだから、言語間の差異はあって当然のものとする言語観である。第2の点は、その差異は有限個の選択肢の中から特にどれを選択するかによって、個別言語の特性が表面化しているという言語観である。そこから導き出されるのは、ことばに関わるさまざまなレベルの分析によって「有限個の選択肢」を明らかにし、広く言語一般の傾向性が見出し得るという言語研究の可能性である。

（池上 2007, p.18 を参照）

IV. 周辺領域の研究成果

認知言語学は、人間の認知のことばの問題に関わることを、広く摂り込むことによって誕生した。ここで言う認知とは人間のこころと身体性に関わるものであり、ことばはそのあらわれである。これを柔軟に解釈すると、「いのちあるすべてのものが生きる」という現象にまで認知言語学は広がりを持つ。この点からも、認知言語学は、学際的な領域としてみなすことができる。

（辻 2002, p.182）

本章では、人間の認知や言語から遠い分野と思われるものから、比較的近くにある分野まで、関連する領域の研究成果を概観し、認知言語学の導入とする。

1. 事態把握にかかわる心理的な過程

人間が自らに備わった認知能力に基づいて事態を把握する際には、少なくとも3つの心理的過程があると言われている。ここで言う事態把握とは、人間（広義の生命体全体）にとっての「刺激と反応」の関係として捉えなおすことができるものである。

第1の過程は、人間が進化の過程で身につけた感覚器官を用いてある刺激を感知するという段階である。そこでは、刺激を受けたという事実が人間の身体内に起こった出来事として捉えられている。第2の過程とは、その刺激（或いは、刺激源）が身体外に存在するということが知覚される段階である。第3の過程は、その刺激が何であるのか、そして、その刺激は自らの存在とどのようにかかわっているのかが認識される段階である。この段階になって、その刺激（源）がもつ意味は主体的に意味づけられたものにほかならない。

2. 主体的な外界の認知

外的な刺激を認知し、その場面において最適な反応する（即ち、反応する）という行為は人間だけに限られたものではなく、生命全般に共通する営みとして捉えることができる。たとえば、比較的原始的な生命体が自らの生命を維持するには、どのような営みを行うことが予測されるであろうか。その生命体は食料となるものを探し求め、確保したものを摂取する。また、生命の危険となるものは遠ざけ、種の存続のためには同種の異性を求めるであろう。

個々の営みは単純なものに見えるが、この原始生命体がそれぞれの場面で意味づけの営みを行っているという事実がここでは重要になる。食料の確保には「食べられる／食べられない」、生命の危険を避けるには「危険／無害」、更には、種の存続に際しては「同種／異種」、「雌／雄」という判断がなされる。一見当然のことも思えるが、上の例で観察した原始生命体は外界を主体的に意味づけている。ここで意味づけという行為が「主体的」である点を強調するのは、この生命体が意味を解釈する対象を自らの存在とのかかわりの中で認識しているからである。

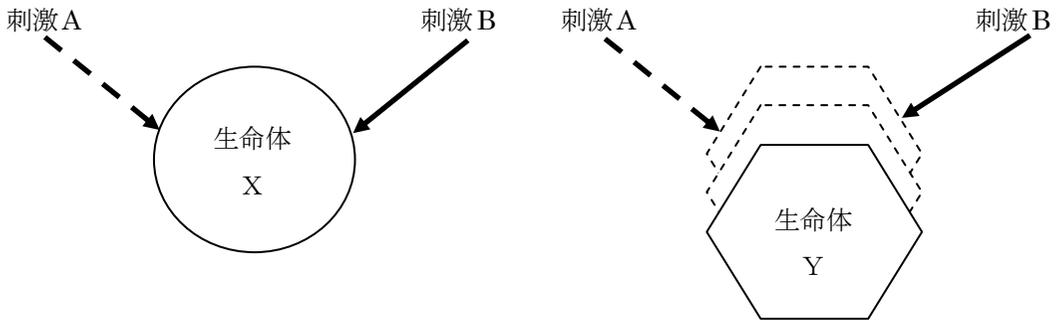
3. 存在の認識

上の例で観察した原始生命体は、(恐らく)外界の刺激をすべて感知できるほど複雑な構造をしていない。この生命体にとっては、自らの感覚器官で感知できる対象だけが意味づけの対象となり、感知できない対象は存在すらしていないものとして不問に付される⁹⁾。これを説明しているのが、下の図3である。

図3異なる形態をもつ2つの生命体(X/Y)に2種類の刺激(A/B)を近づけたことを表し、それぞれの刺激を表す波線矢印と実線矢印は刺激の種類、量、方向を表している。そ

の結果、生命体 X は静止したのに対し、生命体 Y は下方向に移動した。

図3. 異なる生命体による主体的な意味づけ



それぞれの刺激に対する生命体X/Yの反応¹⁰⁾を整理したものが、下の①から④である。

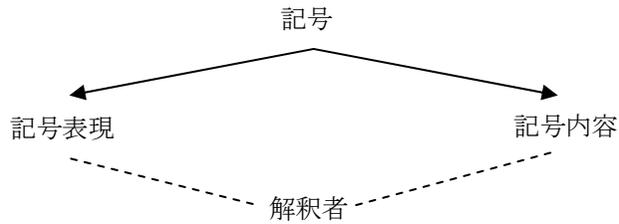
- ① 2つの生命体は、同時に同じ環境に置かれた
- ② それぞれの刺激に対して異なる反応を示していることから、2つの生命体は異種・異質である
- ③ 存在すら認識していないことから、生命体 X にとって刺激 A/B ともに意味がない
- ④ 好ましくない存在として認識していることから、生命体 Y にとって刺激 A/B ともに意味がある

刺激A/Bに対して生命体X/Yが異なる反応を示したということは、それぞれの生命体は同じ刺激を異なるものとして解釈している（即ち、意味づけている）ということを表している。2つの生命体が同一の刺激に異なる意味づけをしたということから、意味とは何かに内在しているもの（ばかり）ではなく、その対象を意味づける主体¹¹⁾にとっての意味ということになる。

4. パースの記号観

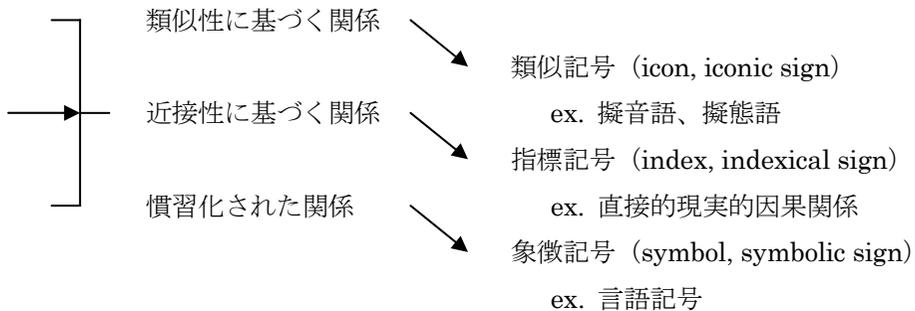
ソシュールが記号の内部構造を記号内容と記号表現という二項関係として想定したのに対し、パースは記号の「解釈者項」を想定し、三項関係で捉えようとしている。それを表したのが、下の図4である。

図4. 記号の三項関係



解釈者項を想定することにより、記号内容と記号表現とが完全に恣意的であるという捉え方には微修正が必要となる。なぜなら、そこには少なくとも3種類の関係が成り立つからである。それを表したのが、下の図5である。

図5. 記号を構成する要素間の関係



類似性に基づく関係からなる記号というのは、擬音語や擬態語のように既に存在する何かが発する音や、その様態を動機づけとして成立する記号のことである¹²⁾。また、近接性から成る記号というのは、「その対象と直接物理的につながっていて、その対象から実際に影響を受けることによって、その対象を表意するものを言う。」(米盛 1981, p. 115) これらの記号がすでに何らかの類似する対象や連結する対象の存在によって動機づけされるのに対し、慣習化された記号というものは、解釈者によってのみ関係づけられる記号である。

象徴記号とはその対象との類似性(第一次性)とか事実的連結(第二次性)によってではなく、もっぱら一般的観念または解釈思想(真正の第三次性的媒介)によって、その対象を表意するものを言う。言語記号—特に一般概念を表意する言葉—は申請の象徴記号である。

(米盛 1981, p. 125)

言語研究の対象が **symbolic sign** としての記号であるとされるのは、その記号がさまざまな過程を経て慣習化に至り、安定した状態にあることが認識されているからである。それ以

前の（即ち、慣習化に至る前にある）記号の不安定感は、その意味が拡張する可能性を表している。この意味の流動性は、記号の創造的な側面を反映していると考えられる。

V. おわりに

最新の言語理論がどのような過程を経て成立したのかを振り返るために、構造主義言語学の萌芽期であるソシュールの導入と、認知言語学に大きな影響を与えた周辺領域の研究成果までの言語観の変遷を歴史的にたどってきた。今回は、構造主義のアンチテーゼとして登場するチョムスキーの認知革命、ハリデーの機能主義を概観し、認知言語学へ至ることになる。そこでは、情報提供が不十分であったように感じられる、構造主義言語学の発展にも言及する予定である。

筆者の主たる研究テーマは「言語使用における意味生成の仕組み」を解明することなので、実際にことばを使用する場面において（即ち、ことばのやり取りを通じて）、どれだけの意味がそこに発生し得るのかという問題に強く魅かれる。それは恐らく、文学作品の解釈を通じて、ことばでは語り尽くせないほど魅力的な表現に何度となく遭遇し、そこに作り出された意味の豊かさに感嘆させられてきた経験によるものだろう。また、筆者自身が、ことばのやり取りの中で意味が創造されてゆく過程を徹底的に分析し、その意味が伝わるまでの仕組みを解明することができれば、日常的な言語表現がより豊かなものになるのではないかと考えたためである。

筆者の研究テーマが、1人の研究者として、一生を捧げるに値するものであるということを確認させたのは、認知言語学である。認知言語学は、次のように主張する。意味というものは認識しようとする対象に内在するものではなく、その対象を主体的に意味づける人間の認知の営みによって創り出されるものである。これを文学作品の解釈に置き換えると、作品の表現が魅力的なのは、修辭的な技巧による装飾が施され、その文体が美しいから（ばかり）ではない。そこには、作者が解釈した対象の意味が読者に理解できるものとして表わされており、読者はそれを主体的に解釈する自由が与えられている。さらに換言すれば、読者は、自らの言語的・文学的経験の程度に応じた作品の解釈が許されているのである。

こうして、文学作品の鑑賞と称した他者の批評を押し付けられることがなくなった筆者は、認知言語学によって「主観的な意味の読み取り」という自由を得た。この開放感を若い研究者たちと共有するに際し、筆者は、認知言語学が正当な流れをくむ言語理論であることを再確認しておく必要があったので、その流れを言語学史の概論という形でまとめることにした。

限られた資料と不十分な知識で言語学の歴史をまとめようとするのは、危険な冒険である。それを承知で挑んだのは、言語学の（歴史を含めた）全体像を知らずにいる後発の研究者が、常に理論言語学者を追従することしかできずにいるからである。学問の世界における真の自由とは、研究分野の全体を見渡す機会を得、進むべき道を自分で決めることである。その分

野を先導する者がどのような言語観を継承し、どの方向へ進もうとしているのかも知らずに後からついて行く限り、彼ら研究活動に真の自由はない。

同時に、新たな道を開拓することだけを自らの役割とし、後発の研究者に実証研究をさせるだけの開拓者は、真の指導者とは言えない。その学問分野が成立するまでの歴史を明らかにし、できるだけ多くの道を示し、進むべき道の選択を若い研究者にゆだねることができなければ、独りよがりの研究者に成り下がってしまう。後発の研究者に自由を与えることは、自らが先導する学問分野に豊かな研究をもたらすことになるのだから。

注

- 1) ここで、哲学的にある対象を考察する場合、始めから直接の対象（ここでは、ことば）に着手していないという点は注目に値する。その対象に最も近い別の対象（ここでは、人間）を想定し、それとの関係からもとの対象（ここでは、ことば）の本質に接近しようとするという手続き（或いは、方法）は、現代の言語学が理論を構築する際にも用いられている。
- 2) 他方で、文化に対する自然の存在は人間の意思では操作することができないものへの畏敬の念となり、多神教を基盤とした自然崇拜の根拠とされた。
- 3) このほかにも、より具体的に発展させた問題相互の組み合わせから、近代的な言語理論の基礎をうかがい知ることができる。例えば、(b)と(c)から規範文法が要請され、(c)と(d)から機能主義言語学が誕生したと考えることができる。
- 4) 「定理IV 精神と身体とは実在的に区別される。」の「証明」も参照されたし。（山田訳 2006, p.150-151）
- 5) 最初から、人間のコトバはこうあるべきだ、あるいはこうであるはずだという結論があって、その結論を実証するために都合のよい例だけを使いながら適当に論を進めていくという態度が、どちらかと言えば優勢でした。（町田 2004, p. 17）
- 6) ソシュール（Ferdinand de Saussure, 1857-1913）が言語学の祖と称されるのは、伝統的な言語研究の中で暗黙の了解とされてきた言語観を否定することにより、言語学が取り組むべき研究対象と、その方法を明らかにしたためであると言われている。
- 7) 「言語を相対的に捉えようとする研究」とは、「そもそも文化が違えばそこで話されている言語も違うはずである」という程度のものである。多くの場合、欧米至上主義の影響から、言語研究者の多くは自国の言語の絶対的な優位性を主張する傾向にあったと言われている。また、その研究内容も、研究対象となる言語と研究者の母語との間にある構造上の差異を記述するにとどまっていた。
- 8) ここに示したのは「弱い仮説」と呼ばれるもので、言語相対説として受け入れられている。それに対し、『人間の思考や認識のあり方は、その共同体が使うことばが規定する』という「強い仮説」もあるが、その極端さゆえに受け入れられないことが多い。認知言語学は、それを「焦点化（profiling）」の問題として説明する。（辻編 2002, p. 70）
- 9) こうした対立関係は、「+/-」ではなく「+/-±」と表記される。
- 10) その先に想定されるのは、生命体 X にとって刺激 A/B のいずれかが生命の危険となるものであった場合には、遠からず自然淘汰される運命である。同様に、生命体 Y が刺激 A/B のいずれかより速く移動できない場合には、生命体 Y にとって好ましくない状況が待ち受けていることであろう。

しかし、その一方で、認知言語学は生命体が時間的・空間的に異なる場面では、今回と違った反応を示すこともあり得るということを認めている。これは、認識論で言う恒常仮説に対する考えである。恒常仮説については本多（2005）を参照（p. 287-288）

- 11) 認知言語学では「解釈者」という用語を用いる。
- 12) 記号の伝達機能と主体との関係に言及しつつ、池上（1984）はコードを逸脱しても「メッセージそのものへの志向性」を高める異化の作用について説明している。（p. 193-206）

参考文献

- 安藤貞雄(1986)『英語の論理・日本語の論理：対照言語学的研究』大修館
- Noam Chomsky(1966) *CARTESIAN LINGUISTICS: A Chapter in the History of Rationalist Thought*, Harper and Row（川本茂雄訳, 1976『デカルト派言語学：合理主義思想の歴史の一章』みすず書房）
- 深田智・仲本康一郎(2008)『講座認知言語学のフロンティア3：概念化と意味の世界』研究社
- Guiraud, P.(1971) *La semiologie*（佐藤訳, 1972.『記号学：意味作用とコミュニケーション』白水社）
- 本多 啓(2005)『アフォーダンスの認知意味論：生態心理学から見た文法現象』東京大学出版
- Halliday, M. A. K (2001) *An Introduction to Functional Grammar*, London, Arnold
- 早瀬尚子・堀田優子(2005)『英語学モノグラフシリーズ 認知文法の新展開：カテゴリー化と用法基盤モデル』研究社
- 池上嘉彦(1984)『記号論への招待』岩波新書
- 池上嘉彦(1992)『詩学と文化記号論』講談社学術文庫
- 池上嘉彦(2006)『英語の感覚・日本語の感覚：<ことばの意味>のしくみ』NHK ブックス
- 池上嘉彦(2007)『日本語と日本語論』ちくま学芸文庫
- 池上, 他(1994)『文化記号論：ことばのコードと文化のコード』講談社学術文庫
- 池上, 他訳(1998)『認知言語学入門』大修館
- 石橋幸太郎主幹編集（1973）『現代英語学辞典』成美堂
- 出 隆訳(1959)『アリストテレス 形而上学（上）』岩波文庫
- 出 隆訳(1961)『アリストテレス 形而上学（下）』岩波文庫
- Labov, W (1973) “The Boundaries of Words and Their Meanings,” *New Ways of Analyzing Variation in English*, ed. By Bailey, C. and Shuy, R, p. 340-373, Georgetown University Press, Washington.
- Lakoff, G (1987) *Woman, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*, Univ. of Chicago Press（池上他訳, 1993.『認知意味論—言語から見た人間の心』紀伊国屋書店）
- Lakoff, G and Johnson, M (1980) *Metaphor We Live By*, Univ. of Chicago Press（渡部他訳, 1986.『レトリックと人生』大修館）
- 水地宗明・田中美知太郎訳（1974）『プラトン全集2 クラテュロス, テアイテトス』岩波書店
- 森田良行(1998)『日本人の発想、日本語の表現：「私」の立場がことばを決める』中公新書
- 日本記号学会編(1994)『記号学会研究14：生命の記号論』東海大学出版
- Robins, R. H.(1990) *A Short History Of Linguistics* (3rd. edition), London, Longman（中村完・後藤斉訳, 1967.『言語学史 第三版』研究社）
- 田中晴美(1988)『現代言語学辞典』成美堂

- 谷川多佳子訳(1997)『デカルト方法序説』岩波文庫
テイラー&瀬戸(2008)『認知文法のエッセンス』大修館
Taylor, J. R. (2002) *Cognitive Grammar*, New York, Oxford
辻 幸夫編(2002)『認知言語学キーワード事典』研究社
外山滋比古(1992)『英語の発想・日本語の発想』NHK ブックス
Ungere, F and Schmid, H. J. (1996) *An Introduction to Cognitive Linguistics*, London, Longman
(池上他訳, 1998. 『認知言語学入門』大修館)
山田弘明訳 (2006)『省察デカルト』ちくま学芸文庫
米盛裕二(1981)『パースの記号学』勁草社
Webster, J. (ed.) (2009) *The Essential Halliday*, U.K, Continuum

(平成 21 年 5 月 25 日受付、平成 21 年 7 月 21 日再受付)